

1つの句を形成する2文節のアクセント型の組み合わせ及び修飾関係 —句頭の上昇を基準とした解釈の試み—

Accentedness and modification structure of two bunsetsu forming a single prosodic phrase: A pilot survey on news broadcast

全 美 佳

要旨

東京方言では2つの文節が1つの韻律句を生成する場合、後部文節で第1モーラから第2モーラにかけての音調の上昇が生じないことがある。この現象を本稿では句頭の上昇の消失と呼び、その生起環境を調べるための本格的な実験前の準備段階として、関連要因を探索することを目的とした調査を行った。方法は、非実験環境で収録した音声資料から句頭の上昇が消失している文節を収集し、当該文節と先行文節の2文節の関係で共通する要因を抽出する方法を採用した。分析した項目は2文節のアクセント型の組み合わせ、2文節の修飾関係の2つである。従来の研究では *minor phrase* の定義によって、1つの句に含まれるアクセント核の数を最大1つまでしか許容していない。そのため、2文節が両方とも有核語である場合は、後部文節で句頭の上昇が消失し、前部文節と後部文節が1つの句にまとまっても、2つの句と認められ、1つの句を形成する2文節の関係を調べるための分析対象から除外されていた。本調査では句頭の上昇の存在を基準とした「句」の定義を用い、「有核語+有核語」を含むすべての文節を検討した。その結果、アクセント型の組み合わせ「有核語+有核語」、「有核語+無核語」、「無核語+有核語」、「無核語+無核語」の4種類すべてにおいて句頭の上昇が消失しているデータが存在することが確認された。また、修飾関係に関しては「名詞助詞+動詞」、「程度副詞+動詞」、「名詞ノ+名詞」、「形容詞+名詞」、「動詞+名詞」、「～テイル類」、「～トイウ」の7種類において句頭の上昇が消失しているデータが存在していることが確認された。

キーワード：dephrasing、句頭上昇の消失、*minor phrase*、*accentual phrase*

1 はじめに

音調（声の高さの変化のあり様）の切れ目によって隔てられた音調的段落のことを「句」と言う。そして、音調の切れ目のことを「句切り」と言う（川上 1961：71）。例えば「去年もらった財布を落とした」という文を落としたのは去年もらった財布だという意味で発話する場合、句切りが置かれる位置によって、句は次の (1)～(3) のうちいずれかの形をとる。{ } は句の範囲を示す。

- (1) キョ ネンモラッタ サ イフオ オ ト シタ { } { } { }
- (2) キョ ネンモラッタ サ イフオオト シタ { } { } { }
- (3) キョ ネンモラッタサイフオ オ ト シタ { } { } { }

頭高型の「キョネン」を除いて (1) は {サイフオ} と {オトシタ} の前、(2) は {サイフオオトシタ} の前、そして (3) は {オトシタ} の前にそれぞれ句切りが置かれる。この際、句切りの位置を基準にして (1) は3つの句、(2) と (3) は2つの句を持つ。これらに共通するのは、句切りのすぐ後ろにあるモーラ（または音節）は低く発音され、その次のモーラは高く発音されるといった音調の上昇が生じていることである。句切りの後ろからは新しい句が始まり、この上昇は句の開始を表す句音調の弁別の特徴であるため「句頭の上昇」と呼ばれる。つまり、この上昇は句切りをどこに置くかによってその位置も変わってくる。

それに対して「キョネン」と「オトシタ」のアクセント核は、それ自体を単独で発音する場合だけでなく、先行する文節と一連に発音する場合にも下降位置は変わらず、そのまま保持されている。アクセント核は語の弁別機能を持ち、核の位置が変わると別の意味を指すことになるからである（例：ハシガ（端が）、ハ¹シガ（箸が）、ハシ¹ガ（橋が））。従って、句の音調は句頭の上昇とアクセントによる下降との合成から成り立つとされる（川上 1961：74、上野 1989：190）。

句頭の上昇は句切りが置かれる位置に現れると述べたが、その位置には多少の制限がある。まず、発話される句は言語としての意味を持つ必要があることから、句の最小の単位は文節（橋本 1934：7）となることが考えられる（{自} {転車} は不可能）。そうであれば、この上昇は句の発端に位置する文節の第1モーラと第2モーラに重なる形で現れることになる。また、句切りは文の意味を区別する重要な手がかりであり（服部 1946）、上昇の位置は統語構造と関連することから（Kubozono 1993：146、Selkirk and Tateishi 1991：529）、統語構造を無視して句切りを置くことには注意が必要であることがわかる。例えば (1)～(3) とは反対に、「キョネン」の後ろに句切りを置くと文の意味は全く違って来る。

- (4) キョ ネン モ ラッタサイフオ オ ト シタ
- (5) キョ ネン モ ラッタサイフオオト シタ

(1)～(3) が、落としたのは去年もらった財布であることを表している反面、(4)～(5) は「去年 | もらった財布を落とした」のように、もらった財布を落としたのは去年であるという解釈される（| は統語の境界を示す）。要するに、句頭の上昇は個々の語が持つ意味には関係しないが、文の構造、特に上のような多義文の意味を正しく区別して発話

し、理解するにあたっては重要な役割を果たしていると言える。

以上、句頭の上昇が生じる場合を見てきた。ここからは、句頭の上昇が生じない場合について考える。(1)と(3)の「オトシタ」及び(1)と(2)の「サイフオ」は、文節の前に句切りが置かれ、句頭の上昇が生じている。それに対して、(2)の「オトシタ」及び(3)の「サイフオ」は、先行文節との間に句切りが置かれておらず、上昇が生じていない。このうち、本稿で着目しているのは上昇が生じていない場合である。以下本稿では、(1)と(3)の「オトシタ」及び(1)と(2)の「サイフオ」のように文節の前に句切りをおいて発話する際には句頭の上昇が生じるが、(2)の「オトシタ」及び(3)の「サイフオ」のように先行文節と一続きに発音する際にはそのような上昇がなくなることを句頭の上昇の消失と呼ぶ。

上昇が消失する環境は、一見すると統語構造に関する(4)と(5)を除けば、句切りを置くか置かないかで説明できるように思われる。しかし、実際の自然な発話における句頭の上昇の出現は、統語構造だけでは説明できない場合があり(Fujisaki and Kawai 1988、Kitagawa 2005、Ishihara 2007、Kubozono 2007)¹、消失の要因は一層不明である。

(2)の「オトシタ」及び(3)の「サイフオ」の場合も当該文節1つだけでは上昇が消失している原因を調べるのが不可能である。しかし、句頭の上昇が消失している文節は独立句を形成せず、先行する句に融合されるので、先行文節との関係を利用すれば、どのような条件で2つの文節が1つの句にまとまるかを調査することが可能であると考えられる。そこで、本稿では句頭の上昇が消失している文節と先行文節の2文節の関係に重点をおいて、これらがどのような関係にあるとき、句頭の上昇が消失するかを検討した。

1つの文は1つあるいはそれ以上の句からなり、1つの句は1つあるいはそれ以上の文節からなる。従って、1つの句を形成する2文節のアクセント型の組み合わせ及び修飾関係を調べることは、1つの文がどのような音調型で発話され、また形成するかを研究するための基礎資料になるという点で意義があると思われる。

2 先行研究及び本稿の目的

この節では句の定義について説明し、句に関する本稿の立場を述べる。そのあと先行研究並びに本稿の目的を述べる。

句に関する定義は「句」(川上 1957:50、川上 1961:71、上野 1989:188)と *minor phrase* (McCawley 1968:137、Poser 1984:147、Pierrehumbert and Beckman 1988:6)の2つがある²。両者は音調の上昇を句の始まりとする点では共通している。しかし、「句」は1つの句の中に2つ以上のアクセント核が含まれることを認めているのに対して、*minor*

¹ フォーカス、wh構文、アクセント型の組み合わせなどとの関係によって統語構造とは無関係に韻律構造が形成される場合があると述べられている。

² Pierrehumbert and Beckman (1988) では *accentual phrase* という用語を使用している。

phrase はアクセント核を最大 1 つまでしか認めないという点が異なる。例えば 2 文節とも有核語である「青い屋根」であれば、「句」の定義では、句頭の上昇が生じている位置によって、{アオイヤネ}あるいは{アオイ}{ヤネ}のいずれの形も可能である。一方、minor phrase の定義では、{アオイ}{ヤネ}のように二つの句としか認められない。つまり、「句」は句頭の上昇が生じていることだけが条件となり、minor phrase は句頭の上昇が生じていることとアクセント核が最大 1 つまで含まれるということが条件となる。本稿では川上(1957、1961)、上野(1989)などによる「句」の定義と同様に 1 つの句の中に 2 つ以上のアクセント核が含まれることを認めている。

句頭の上昇の消失に関する研究は、McCawley (1968 : 181)、Kohno (1980 : 57)、Poser (1984 : 152)、Pierrehumbert and Beckman (1988)、Kubozono (1993 : 148)、Sugahara (2002 : 655) などがある。後部文節で音調の上昇が生じていないことをそれぞれ「boundary deletion rules」、「minor phonological phrase incorporation」、「compression of minimal minor phrases」、「dephrasing」(具体的な用語の定義はなされていない)、「minor phrase formation」、「dephrasing」と呼んでいる。いずれも minor phrase に基づいている。

従来、句頭の上昇の消失に関わる要因として、アクセント型の組み合わせ、修飾関係、フォーカスが取り上げられてきた。アクセント型の組み合わせについては、2 文節のうちいずれかが無核語 (McCawley 1968 : 178)、後部文節が無核語 (Kohno 1980 : 58)、前部文節が無核語 (Poser 1984 : 157、Kubozono 1993 : 150) である場合に後部文節で句頭の上昇が消失するなど、様々な結果が報告されている。

修飾関係と関連して McCawley (1968 : 177) は連用修飾に触れており、Kohno (1980 : 56) は連体修飾、連用修飾のいずれの場合にも句頭の上昇が消失することがあると述べている。

また、前部文節に強調副詞(例：一体)がくるかフォーカスが指定されている際には、後部文節で音調の上昇が起こらない場合があることが報告されている (Kubozono 1993 : 141、Fujisaki and Kawai 1988 : 185、Pierrehumbert and Beckman 1988 : 28)。

Sugahara (2002 : 658) は、2 文節とも無核語で、2 文節の間に統語の境界が存在しておらず、前部文節にフォーカスが置かれていること、この 3 つの条件がすべて揃っている場合に後部文節で句頭の上昇が消失すると結論付けている。

しかし、従来の研究は定性的な観察に基づいて要因を設定したあと、その要因と消失との関係を分析している。そこでは、実際の連続発話を利用して関連要因を探ろうとした試みはなされていない。既存の研究結果が一致を見ていないことには、このような主観的な基準による要因の設定が影響している可能性があることも考えられる。従って、句頭の上昇が消失する環境を調べるためには、本格的な実験に先立ち、従来の研究で取り上げている要因が妥当であるかを確認し、実験に用いる要因としてどのような要因が重要であるかを検討する必要がある。そこで本稿では、本格的な実験前の予備調査として、実際に運用

1つの句を形成する2文節のアクセント型の組み合わせ及び修飾関係
 一句頭の上昇を基準とした解釈の試み

された言語資料(データ)から、句頭の上昇の消失に関わる要因を抽出することを試みた。

本調査では非実験環境で収録したデータを用いるため、2文節の関係はアクセント型の組み合わせ、修飾関係に的を絞った。フォーカスについては、フォーカスの存否の判断基準を設けることが困難であったため、本稿では扱わないこととする。

3 データ

データは、NHK(日本放送協会)のウェブに公開されているアナウンサーの音声を用いた。テレビニュースとラジオニュースでは同じ日に同じ内容のニュースが流れている³。テレビニュースのアナウンサーが読み上げた原稿とラジオニュースのアナウンサーが読み上げた原稿を照らし合わせながら、両方のニュース内容が同一なものを選択し、当該の音声ファイルをダウンロードした。結果的にニュース1つにつき、アナウンサー2人の音声ファイルが確保できた。ニュース内容に偏りがないう社会、国際、経済などすべてのカテゴリーを対象に適切と思われるタイトルを任意に選定した。データの詳細は表1の通りである。収集した音声ファイルは計28(記事の原本は14)である。アナウンサーは、ラジオニュースは女性が2名、男性が6名であり、テレビニュースは女性が4名、男性が4名で計16名である。アナウンサー1名が2つ以上のニュースを読み上げた場合もある。1ファイルの長さは約1分30秒、データ全体の長さは約39分である。

表1 ニュースタイトル(平成22年)

No.	月/日	ニュースタイトル	No.	月/日	ニュースタイトル
1	7/2	小笠原世界遺産登録で調査へ	8	8/15	Uターンの混雑
2	7/2	参院選消費税めぐり考察活発に	9	8/15	はやぶさカプセル
3	7/5	成田空港新検査装置実証実験	10	8/19	高齢ドライバーマークを変更
4	7/9	広島原爆納骨者名簿を発送	11	8/19	自動車世帯当たり台数が初の減少
5	8/11	モスクワ有害物質濃度下がる	12	8/20	相撲協会外部副理事長提案へ
6	8/13	米バス事故過失致死罪も視野	13	8/20	米で卵3億8000万個回収へ
7	8/13	米GM決算6年ぶりの高水準	14	8/27	口でい疫27日に終息宣言へ

句頭の上昇の消失に関する判定は、音声分析プログラム Praat (version 5.2.28) を利用し、F0(基本周波数)形状を参照しながら筆者が行った。消失に関する判定基準は(i)後部文節の第1モーラは先行モーラよりF0が高くないこと、(ii)後部文節では第1モーラから第2モーラにかけての音調の上昇が生じていないこと、(iii)後部文節では第2モーラ以降でもF0が上昇していないこと、(iv)後部文節の第1モーラにアクセント核がある場合は、後部文節の始まりから核の下降位置までの間にF0が上昇していないこと、この4項目をすべて満たしていることを条件とした。また、母音が無声化している場合は先行モーラと後続

³ ラジオニュース: www.nhk.or.jp/r-news/、テレビニュース: www3.nhk.or.jp/news/

モーラの F0 を参照しながら判断し、F0 の抽出が不可能な場合は分析対象から除外した。「団子」のように第1音節に促音や撥音が含まれている場合は「ダ」と「ゴ」の母音中央部を比較した。図1と図2に消失に関する判定の例を示す。横軸は経過時間(秒)、縦軸はF0(Hz)、図の中央にある太い曲線は当該音のF0を表す。F0は対数変換して示した。

図1の左側の「コノナツヤスミ」は「ナ」より「ツ」のF0が高くなっており、後部文節の第1モーラから第2モーラにかけて音調の上昇が生じていることがわかる。上昇が生じている位置が前部文節の「コノ」と後部文節の「ナツ」の2箇所であるので、「コノナツヤスミ」は{コノ}{ナツヤスミ}のように2つの句として認められる。一方、図1の右側のグラフでは「ナ」から「ツ」にかけての上昇が見られない。「コノナツヤスミ」の中で音調の上昇が生じている所は「コノ」の1箇所であり、「コノナツヤスミ」は{コノナツヤスミ}のように2文節全体が1つの句として認められる。この場合、図1の左側の「コノナツヤスミ」は、上記の消失に関する判断基準(ii)を満たしていないので句頭の上昇が生じていると判定し、右側の「コノナツヤスミ」は、消失に関する判断基準をすべて満たしているので句頭の上昇が消失していると判定する。

図2の「マーク」は頭高型の有核語であり、第1音節内でF0が上昇し始めて頂点に達したあと再び下降するといった音調の変化が起こる。図2の左側の「マーク」は始まりと終わりのF0がほぼ同じ高さを示しているが、第1音節「マー」の内部に明確なF0の上昇が観察される。しかし、図2の右側の「マーク」にはF0の上昇が見られない。先行文節「アタラシー」の最後のモーラからそのまま下降し「アタラシーマークニ」全体が1つの句にまとまっている。この場合、図2の左側の「アタラシーマークニ」は、消失に関する判断基準(iv)に反しているため句頭の上昇が生じていると判定し、図2の右側の「アタラシーマークニ」は、消失に関する判断基準4項目をすべて満たしているため句頭の上昇が消失していると判断する。

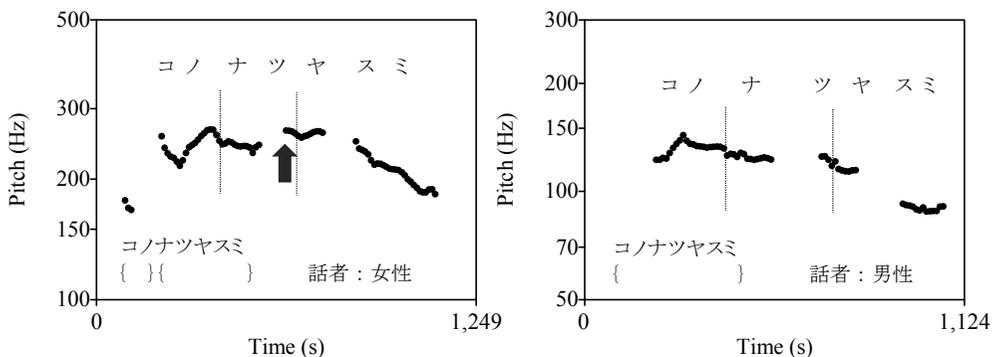


図1 句頭の上昇の消失に関する判定例：無核語+有核語
 テキスト：この夏休み
 [左] 句頭の上昇あり、[右] 句頭の上昇の消失

1つの句を形成する2文節のアクセント型の組み合わせ及び修飾関係
 一句頭の上昇を基準とした解釈の試み

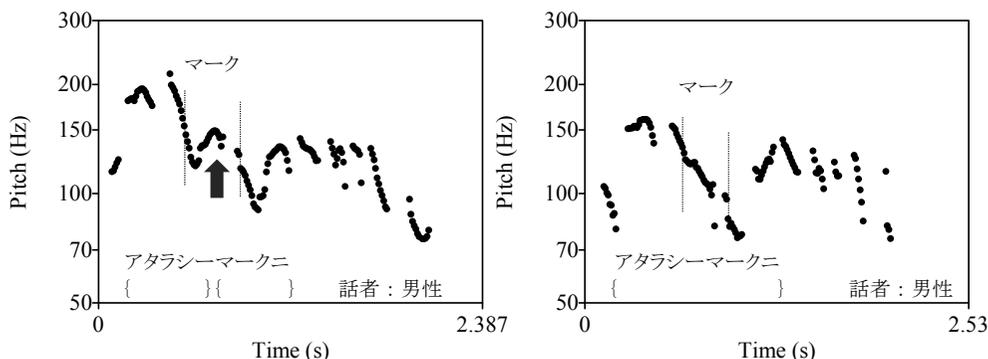


図2 句頭の上昇の消失に関する判定例：有核語＋有核語
 テキスト：新しいマークに変更することを決めました。
 [左] 句頭の上昇あり、[右] 句頭の上昇の消失

上記の図1～図2より、同一の2文節であっても後部文節で句頭の上昇が消失している場合とそうでない場合があることを確認した。図2の右側に示されている「アタラシーマークニ」のF0形状からもわかるように、2文節が両方とも有核語である場合にも、後部文節で句頭の上昇が消失することがある。しかし、従来の研究は *minor phrase* の定義を基準に句の範囲を定めているので、後部文節で句頭の上昇が消失し、後部文節が前部文節と一緒に1つの句にまとまっても、原則として有核語が2つある場合は2つの句と認めている。そのため、図2の右側の「アタラシーマークニ」のような場合は、一つの句にまとまっても2つの句と認められ、1つの句を形成する2文節の関係を調べるための調査対象から除外されていた。ゆえに、本稿で川上(1957, 1961)、上野(1989)の「句」の定義を用い、先行研究の追試を行うことは、従来分析対象から外されてきた「有核語＋有核語」を含め、句頭の上昇が消失する環境を再検討するという点でも意義があると考えられる。なお、有核語が連続する場合を除く他のアクセント型の組み合わせについては、「句」と *minor phrase* とが認める句の範囲はほぼ同じである⁴。

データに含まれているすべての文節(2526、延べ数)に対して消失の有無を判定した結果、句頭の上昇が消失していると認められたのは382文節であった。句頭の上昇が消失し

⁴ ここで「ほぼ」という表現に限定している理由は、消失に関する判定基準(iii)及び(iv)について本稿と先行研究(Pierrehumbert and Beckman 1988など)の間に相違があるためである。本稿では文節を句の最小単位と考え、文節の第1モーラから第2モーラにかけてF0が上昇している場合は、当該文節を独立句として認めている。しかし、従来の研究では必ずしも文節を基準として上昇の有無を論じてはいないようである。特に、後部文節に有核語があるときは、後部文節の第1モーラから核の位置までF0が上昇していても、その右上がり方が前部文節のF0ラインと直線上にある場合、すなわちF0ライン上に凹みがなければ、後部文節を独立句として認めず前部文節とともに1つの句にまとまっているものと判断しているように思われる。

ている文節は独立句を持たず先行する句に融合されるため、2526 からこの 382 を引いた 2144 がデータに含まれている句の総数となる（{アタラシマークニ} の場合、文節数 2 - 上昇の消失している文節数 1 = 句数 1）。この 2144 句のうち、1 つの文節からなる句は 1790、2 つ以上の文節からなる句は 354 であった。次節では、この 354 句についてアクセント型の組み合わせ、修飾関係を調査した結果を述べる。なお、354 句は述べ数で集計したもので、アナウンサー1 人のみに存在する句、2 人に共通して存在する句がすべて含まれている。

4 分析

4.1 アクセント型の組み合わせ

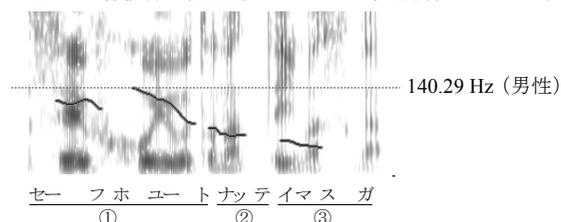
上記の 354 句について、それぞれの句を構成している文節のアクセント型の組み合わせを調べた。補助動詞「～テイル」については、「イル」の第 1 モーラから第 2 モーラにかけて音調の上昇が生じている場合と生じていない場合が両方あったので、「イル」を 1 つの文節として扱った。例えば「読んでいる」は「読んで」と「いる」の 2 つの文節として集計した。その結果を表 2 に示す。アクセント核の有無を基準に A は有核語 (accented) の文節、U は無核語 (unaccented) の文節を表す。表中の AA とその頻度 91 は、1 つの句にまとまっている 2 文節のアクセント型の組み合わせが AA である句が 91 存在していることを示す。この際、句頭の上昇が消失しているのは第 2 文節である。また、AAA は「セーフホユート+ナッテ+イマスガ」のように三つの有核語が一つの句を形成していることを示す⁵。この場合、句頭上昇が消失しているのは第 2 文節と第 3 文節の 2 箇所である。

表 2 アクセント型の組み合わせごとの出現頻度

アクセント型	頻度	アクセント型	頻度	アクセント型	頻度	アクセント型	頻度
<u>AA</u>	<u>91</u>	<u>AU</u>	<u>52</u>	<u>UA</u>	<u>96</u>	<u>UU</u>	<u>87</u>
AAA	1	AUA	2	UAA	7	UUA	8
AAU	4	AUU	2	UAU	2	UUU	2

計 354

⁵ 三つの有核語 (AAA) が一つの句を形成している例。曲線は当該母音の F0 の軌跡を示す。



1つの句を形成する2文節のアクセント型の組み合わせ及び修飾関係
 一句頭の上昇を基準とした解釈の試み

アクセント型の組み合わせのうち頻度が最も高いのは UA（無核語＋有核語）であり、その次は AA（有核語＋有核語）、UU（無核語＋無核語）、AU（有核語＋無核語）の順である。3文節で構成されている句もあるが、その頻度は低く、ほとんどが2文節からなっている。2文節におけるアクセント型の組み合わせ AA、AU、UA、UU の頻度はそれぞれ 91、52、96、87 である（計 326 句）。これにより、2文節のアクセント型の組み合わせ 4通りすべてにおいて句頭の上昇が消失しているデータが存在することが確認された。

4.2 修飾関係

句頭の上昇が消失している 354 句のうち 2文節からなる 326 句について、各々の句を構成している文節間の修飾関係を調べた。文節間の品詞の関係を調査したところ、2文節に関わっている品詞の種類が多く、その種類を絞る必要があった。そこで、アナウンサー2人に共通して存在する句のみに範囲を狭め、最終的に 158 句を分析対象とした。この 158 句はアナウンサー2人が発話した延べ数であり、テキストに変換すると計 79 句になる。79 句について文節間の修飾構造を調べた結果をまとめて示すと表 3 のようになる。下線を施した 2文節は1つの句を形成していることを表し、{ } は句の範囲、+ は文節の境界を表す。

表 3 修飾関係ごとの出現頻度（2文節）

修飾関係	頻度（割合）	例
① 名詞助詞＋動詞	28 (35.4%)	リョ'ーキンノ <u>ネサゲモ+ア'ッテ、</u> { } { }
② 名詞ノ＋名詞	15 (19%)	レンジツノ <u>モ'ーショノ+ナ'カ、</u> { } { }
③ ～テイル類	13 (16.5%)	フタリイ'ジョーノ セタイガ <u>ショユーシテ+イル、</u> { } { }
④ 形容詞＋名詞	8 (10.1%)	<u>ナガ'イ+ネ'ンゲツガ</u> カカ'ル ミト'ーシデ、 { } { }
⑤ ～トイウ	6 (7.6%)	イメ'ージガ <u>ワル'イト+イウ</u> フヒョ'ーノ コ'エガ { } { }
⑥ 程度副詞＋動詞	6 (7.6%)	<u>イッソ'ー+モトメラレ'ル</u> コト'ニ ナリマ'ス { } { }
⑦ 動詞＋名詞	3 (3.8%)	ソ'ーサオ <u>ススメル+ホーシンデ'ス</u> { } { }
合計	79	

表 3 に示されている構造は「名詞助詞＋動詞」、「名詞ノ＋名詞」、「～テイル類」、「形容詞＋名詞」、「～トイウ」、「程度副詞＋動詞」、「動詞＋名詞」の 7 種類である。このうち頻度が最も高いのは「名詞助詞＋動詞」でその割合は 35.4% であり、その次に頻度が高いのは「名詞ノ＋名詞」でその割合は 19% である。「名詞助詞＋動詞」における助詞の種類に

は格助詞と係助詞を両方とも含めてある。「～テイル類」には「～テクル」「～テイク」などの補助動詞も含め、集計した。この際、後部文節に該当するのは「クル」「イク」である。表3の結果は、次のように連用修飾と連体修飾とに分けることができる。

- ┌ 連用修飾：名詞助詞＋動詞、程度副詞＋動詞
 - └ 連体修飾：名詞ノ＋名詞、形容詞＋名詞、動詞＋名詞
- その他：～テイル類、～トイウ

5 考察

前節までの調査結果を踏まえ、1つの句を形成する2文節のアクセント型の組み合わせ、及び修飾関係について検討する。

4.1節では1つの句にまとまっているアクセント型の組み合わせの集計結果をみた。従来の研究は *minor phrase* に基づき、AU と UA だけを分析対象とするか、AU・UA・UU の3つを比較していることが多い。しかし、本稿で調べたところ、1つの句の中に2つ以上の有核語が含まれているのは、AA が 91、AAA が 1、AAU が 4、AUA が 2、UAA が 7 で計 105 句であり、全体の 29.7% を占めている。これを *minor phrase* の定義で判断した場合、2つ以上の有核語を含む 105 句は1つの句としては認められず、結局、分析対象からは外されてしまうことになる。文節数を2文節に限定した場合も有核語からなる AA の頻度は 91 であり、全体の 27.9% を占めている。

本稿では、句頭の上昇を基準とした「句」の概念を適用し、2つ以上の有核語が含まれている句も分析対象に入れ、検討した。上昇が消失している 354 句のうち2文節で構成されているのは 326 句であり、2文節のアクセント型を組み合わせた AA、AU、UA、UU のいずれでも句頭の上昇が消失しているデータが存在することを確認した。

4.2節では、句頭の上昇が消失している 354 句の中から文節数が2文節であり、かつ、アナウンサー2人に共通して存在する句を取り出した 158 句（テキストは 79 句）を対象に、それぞれの句を構成している文節間の修飾関係を調べた。句頭の上昇が消失する文法構造として McCawley (1968) は連用修飾、Kohno (1980) は連用修飾と連体修飾に触れているが、両者は *minor phrase* を基準としており、AA に関わっている修飾構造については検討していない。本調査ではアクセント型の組み合わせが AA である2文節も含め、句頭の上昇が消失している文節とその先行文節の2文節に関する修飾関係を分析した。その結果、1つの句を形成する2文節の修飾関係として7種類の構造が抽出された。この7種類の中には連用修飾、連体修飾がいずれも含まれていた。

6 結論

本稿の目的は、非実験環境で収録したデータから句頭の上昇の消失に関わる要因を抽出することであった。調査の結果、アクセント型の組み合わせは AA、AU、UA、UU の 4 種類すべて、修飾関係は「名詞助詞＋動詞」、「程度副詞＋動詞」、「名詞ノ＋名詞」、「形容詞＋名詞」、「動詞＋名詞」、「～テイル類」、「～トイウ」の 7 種類が抽出された。

それぞれのアクセント型の組み合わせにつき、音調の上昇が消失している頻度を算出したが、後述するように、集計結果で獲得した頻度だけでは、アクセント型の組み合わせ 4 通りのうちの組み合わせが句頭の上昇の消失に最も大きい影響を与えるかなどを比較することはできない。同じく、修飾関係では「名詞助詞＋動詞」の割合が最も高かったが、割合が高いということだけでその修飾関係が最も消失しやすい構造であるとは断言できない。その理由は、本稿で扱ったデータは文節数、モーラ数、アクセント核の位置、データ数などが統制されておらず、定量的な評価が困難であるからである。例えば、アクセント型の組み合わせでは UA の頻度が最も高かったが、もともとデータの中に UA を有する 2 文節の数が多かった可能性も十分あり得る。また、修飾関係では「名詞助詞＋動詞」の割合が最も高く、「動詞＋名詞」の割合が最も低かったが、文中での使用頻度を考慮すると、データの中には「動詞＋名詞」構造より「名詞助詞＋動詞」構造を持つ 2 文節の数が多かった可能性もある。このような問題点を解決するためには、本調査で得られた結果を実験の要因に設定した上で、文節数、モーラ数、アクセント核の位置、データ数などの条件を揃えた実験を行い、句頭の上昇の消失と当該要因との関係を統計的に検証する必要がある。

「付記」

筆者は、修士論文（全 2012）でアクセント型の組み合わせ、修飾関係、フォーカスを要因とした実験を行い、各要因と句頭の上昇の消失との関係を定量的に検討した。参照されたい。

引用文献

- 上野善道（1989）「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育第 2 巻 日本語の音声・音韻（上）』178-205, 明治書院.
- 川上夔（1957）「準アクセントについて」『国語研究』7, pp.44-60.
- 川上夔（1961）「言葉の切れ目と音調」『國學院雑誌』62（5）, pp.67-75.
- 全美柱（2012）「東京方言における句頭上昇の消失」修士論文，一橋大学.
- 橋本進吉（1934）『国語科学講座VI 国語法要説』明治書院.
- 服部四郎（1946）「具体的言語単位と抽象的言語単位」服部四郎（1960）所収.
- 服部四郎（1960）『言語学の方法』pp.447-460, 岩波書店.
- Fujisaki, Hiroya and Hisashi Kawai (1988) “Realization of Linguistic Information in the Voice Fundamental Frequency Contour of the Spoken Japanese.” *Annual Bulletin*:

- Research Institute of Logopedics and Phoniatics*. Faculty of Medicine, University of Tokyo 22, pp.181-188.
- Ishihara, Shinichiro (2007) "Major Phrase, Focus Intonation, Multiple Spell-Out (MaP, FI, MSO)." *The Linguistic Review* 24, pp.137-167.
- Kitagawa, Yoshihisa (2005) "Prosody, syntax and pragmatics of wh-questions in Japanese." *English Linguistics* 22(2), pp.302-346.
- Kohno, Takeshi (1980) "On Japanese Phonological Phrases." *Descriptive and Applied Linguistics* 13, pp.55-69.
- Kubozono, Haruo (1993) *The Organization of Japanese Prosody*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Kubozono, Haruo (2007) "Focus and intonation in Japanese: Does focus trigger pitch reset?" In Shinichiro Ishihara (ed.) *Interdisciplinary Studies on Information Structure*, 1-27. Potsdam: University of Potsdam.
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- Pierrehumbert, Janet and Mary Beckman (1988) *Japanese Tone Structure*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Poser, William J. (1984) *The Phonetics and Phonology of Tone and Intonation in Japanese*. Ph.D. Dissertation, MIT.
- Selkirk, Elisabeth and Koichi Tateishi (1991) "Syntax and downstep in Japanese." In Carol Georgopoulos and Roberta Ishihara (eds.) *Interdisciplinary Approaches to Language: Essays in Honor of S.-Y. Kuroda*, 519-543. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Sugahara, Mariko (2002) "Conditions on Post-Focus Dephrasing in Tokyo Japanese" In Bernard Bel and Isabelle Marlien (eds.) *Proceedings of the 1st International Conference of Speech Prosody*, pp.655-658.

(じょん みじゅ 言語社会研究科博士後期課程)